

## 低塩分飼育技術の現場普及を目指して（その2）

### 技術を活用しためばるブランド化の取り組み

水産研究部 工藤孝也

前回は、当センターで取り組んできた“低塩分飼育技術”の県東部の現場への技術移転のお話を紹介しました。今回は県西部の江田島市でブランド化が進められているめばるへの技術移転に関するお話をしたいと思います。なお、本稿で云う“めばる”は、アカメバル、クロメバル及びシロメバルすべてを指します。

#### 広島県のめばる

広島県では、年間198トンのめばるが広島市中央卸売市場で取り扱われています（平成24年度広島市中央卸売市場年報より）。このうち大部分が広島県で漁獲されたものなのですが、山口県や愛媛県からも数トンから数十トン程度入荷してきます。市場関係者の話では、広島ではめばるの需要が高いことから、他県よりも高い価格で取引されているとのことでした。

当センターでは、めばるについての地元消費者ニーズと漁業者ニーズの高さを受けて、めばるの種苗生産や放流技術開発について研究を進めてきました。種苗生産技術については平成10年に一般社団法人広島県栽培協会へ技術移転を開始し、現在県中西部海域を中心に年間約80万尾の人工種苗が放流されています。

#### めばるは死に易い？

めばるが本県では重要な漁業対象魚であることはご理解頂けたと思います。めばるの主な漁獲法は一本釣り、つぼ網（小型定置網）、刺し網、底びき網等です。いずれの漁法でもめばるはほとんど鮮魚での出荷が一般的です。それはめばるが漁獲後すぐに死亡してしまうため、特に刺し網では網を揚げる際にはほとんどの魚が死んでしまっています。また、その他の漁法でも網擦れによる外傷が激しいことが多く、活魚出荷はほとんどありません。

#### 逆転の発想・めばるを活かす

このようにめばるを活かしてストックするという事はこれまでは全く考えられなかった訳ですが、“低塩分飼育技術”の研究を進める中で、次のことが分かりました。つまり、同じ程度の網擦れを与えた場合、クロメバルに比べ、アカメバルの方が死に易いこと、いずれの種も低塩分飼育の活用で海水飼育よりも生残率が向上することが分かりました。このことは今まで活魚で維持するのが難しいと思われてきためばるを、種の選択と技術により活かすことが出来ることを示しています。

#### 江田島めばるブランド化への技術適用

このようなことが分かり、低塩分飼育技術の移転先を探していたところ、江田島市の深江漁協がめばるのブランド化に取り組んでいるとの情報が入ってきました。漁協の若手漁業者の方が中心になったもので、一部の漁獲物を東京へも出荷しているところでした。話を伺ってみると、現在出荷中の魚にさらに付加価値を付けるために本技術を適用したいとのことでした。そこで地元の江田島市や県庁水産課と連携して、このめばるを“江田島めばる”としてブランド化の後押しすることになりました。

二つの行政機関は商標登録やパンフレット等の販売促進用品の作成を支援しました。当センターは低塩分飼育技術の現場実証試験を担当しました。



図1 低塩分海水飼育により外傷の悪化が防げためばる（上）と海水飼育で外傷が悪化しためばる（下）

試験は1月から2月まで約1ヶ月間実施しました。漁業者の方に技術を実感して頂くために、つぼ網と一本釣りで獲れためばるを、海水と低塩分海水で1週間飼育して生残率を比較しました。

実証試験の結果、もともと傷の少なかった一本釣りで獲られた魚では、差はありませんでしたが、つぼ網で獲られた魚では低塩分海水で飼育した魚より海水で飼育した魚が多く死亡し、室内試験と同一の結果が得られました。つぼ網の魚では、生残率が22%アップした上に、外傷の悪化も抑制されていました（図1）。同時に蓄養に必要な光熱水費、人件費も軽微であることが分かり、現場での効果の再現性が得られるとともに、現場で十分に実践可能な技術であることも分かりました。

この実証試験を通して漁業現場で本技術が活用可能であることを実感頂きました。その後、漁協との間で本技術の特許許諾契約を交わし、現在はさらに販路拡大に向けて取り組みが進められています。



図2 低塩分海水による蓄養を経てに活けられためばる